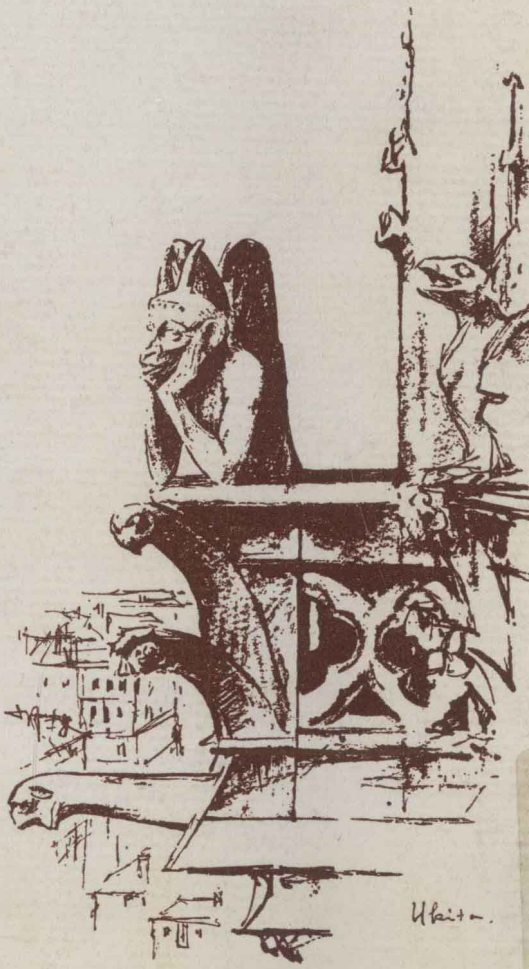
荒地を旅する者たち

加賀乙彦



賀乙彦——荒地を旅する者たち——

新潮

荒地を旅する者たち

昭和四十六年五月三十日　発行
昭和四十九年八月十五日　二刷

著者／加賀乙彦
発行者／佐藤亮一
発行所／株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七十一
電話　業務部（〇三）二六六―五一一一
　　編集部（〇三）二六六―五四一一
郵便番号／一六二
振替／東京八〇八
印刷所／東洋印刷株式会社
製本所／神田加藤製本所

定価九五〇円

© Otohiko Kaga Printed in Japan 1971

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

荒地を旅する者たち

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

第一章

D＊＊にて　九月三日

黒い沼がありました。逆光を受けて鈍く光っているのに暗いのは、光を吸いとる特殊な水質のせいなのかしら。

間近にある対岸は原始時代さながらに木が茂り、しかもその大半は病気にかかったらしく枯れて腐っているのです。この景色から居こぼれたような赤い太陽、水面のわずかな照りかえし、そんな光では沼の暗さを補いえない。

名前をききました。ワンマン・バスの運転手は無愛想でいっぺんこっきりの発音でよくききとれず、でも蛇（セルペン）だけは聞きとれ、たぶん、蛇沼というのです。だんぜんそうよ。爬虫類の冷たくぬらぬらして黒い感じ、それに河みたいに岸沿いの道の続くながっぽそい沼でしたもの。

沼を見たとたん来なけりゃよかったのにと思いました。ぜんたいなぜ来てしまったのか。ずっと来なかったのにね。去年の春、彼がサンタンヌ病院から転院したあと、何度も来ようとしたのに来なかった。勇気がなかったのです。あなたなしでは、わたし一人ではとても彼に会う気持になれなかった。病院てこわい、患者はもっとこわい、そんな場所に今たったひとりで近付きつつあると思うと後悔しました。ジゼルのせいです、それはもうあのひとのせいだ、あのひとが言い出さなければ、詩集をとどけてと頼まなければわたしは来やしなかった。詩集なんて小包で送ればいいのに、ジゼルったらじかに手渡ししてくれと言うのですもの。

深く暗くて薬のようなにおいがする樅林を抜けると急坂にかかり、丘の頂、どきっとしたほど突然、病院です。案外に童話風の軽快な建物、白壁に枯蔦からみ、赤い屋根、ロマン様式の円いせりもち、病院というよりブルジョワの別荘、別荘というより尼僧院のふぜい、バスがいつ去ったのかも知らず眺めつづけ、気がつくとひとりでした。誰もここでは降りなかったのですね。

面会する前に医者に会いたいと願ったのですが院長は不在で、代診の若いドクトゥールは病室内で診察中、かねてから聞き知っていたニコラシャルルという主治医の名前をいうと病気で入院中、それではと面会申込みをすると病状悪化して面会謝絶ということです。窓口の若い女の子は親切で、気のどくがってくれ、あれこれ電話をかけてくれた

のにらちあかず、詩集をおいて帰ろうとすると、出口までおいかけてきました。これは実は口止めされていたのだがと悲しい話してくれました。彼、なにかいまわしいこと、病院に火をつけたか誰かを傷つけたか盗みをしたかわからないけれども、よくないことして独房（セリ）に監禁されてる、そんな話でした。なんでもすっかりぼけて、人間じゃないので（女の子はそう言ったのです）、食事もとらずがちがちにやせ、物もいわないという。この女の子、事務員ではなく看護婦だったのですね、院内のことにとてもくわしい。

彼がかわいそう。彼にあえないならせめて代診の若いドクトゥールに会いたく待つことにしました。その時、日が暮れたのね、暗くなっちゃいました。不安で時刻表を見たら五時半のが最終で、あとそれ一回きり、それに乗らないと帰れないし、病院に泊るわけにもいかず、ままよと四十分ほどバスとドクトゥールを賭けて待つことにしました。

待っている間この手紙ここまで書いたのです。

寒い。林と沼の方角も病院の建物もまっくら。ききなれぬ鳥、ふくろうかしら、こっそり角笛を吹くように鳴いて静か。みずおとは車寄せの前の池の噴水、さむざむと流れています。そこだけ見ればパリの街角とも思える。水銀燈がマロニエと樅の葉を明るい黄に、そう、ネープルス・イエローに照らし、軽やかではなやかで病院とは思えない。書くの忘れてましたけど、ここらあたりは山地のせいか、木々がすっかり黄ばんでまったくの秋、パリではようやくに秋の気配がするという程度でしたけれども。

ピアノを誰かが弾きはじめました。レコードではない、なまの音、胸底の水がゆらめくような曲、モーツァルト、なかなか上手、短調、ああイ短調のロンド、こんなところでモーツァルトをきくなんて、ちょっと指がすべったらそのままはずれていく、患者がひいてるらしい。

建物のまわりを探訪してきました。この尼僧院はいわば本部、事務所、玄関で、童話風の見かけにだまされた気がしたほどきびしく高い石塀が裏にあって、ピアノはその塀ごしにきこえてくるのでした。結構はサンタンヌ病院とそっくり、精神病院てのはどこでも同じ、塀のなかにまた塀があり、鉄格子があり、さらにその奥の独房（セリ）のなかに彼が監禁されてる。何と言うことでしょう。何と残酷で不公平な、あんなに才能のある画家が、人間でなくなるなんて、ひどい。

これはパリ行の汽車のなかで書いています。バスが来るまであと七分というとき、わたしに変なことがおこりました。さっき窓口に置いてきたジゼルの詩集を見たくなったのです。この気持、よくわからない、別に理由もない、人にあげる詩集見たってしようがないのですから。さいわい、親切な女の子、看護婦さんまだいて、詩集の紙包まだわきに置いてあったので、ことわっていそいであけてみた。あの詩集、あのと言ってもあなたは知らないでしょうけれども、日光浴する時ジゼルが読んでいたあの詩集、日に焼け

て表紙は褐色にただれてまくれあがり、扉もないので作者もわからない、妙な詩集なのです。頁を一枚一枚くっているうち、わたし顔を赤らめた、はさみこんだ手紙を探してるような気がしたからです。その時、バスのエンジンの暴力的にあえぐ音、詩集をかえし一礼してかけた、かけた、やっと間に合った次第。

彼に詩集を贈ったジゼルの気持、あなたはどう思います。彼女は獄中にいる、やはり独房にいる、日光浴もできず、だから詩集はいらない、だから彼に贈った。そうでしょうか。彼女はずうっと彼を見舞っていたそうです。このこと彼女にききました。(わたしが日本語で書いてるものだから、みんな珍しそうに見ています。ななめ前の赤毛の青年なんか、何か言いたくて好奇心まるだしなのですけれども、わたし、書き続けています。今は誰とも、あなた以外とは話したくない)、昨年三月末にD＊＊に転院する彼に別れを告げた時、わたし、一度だけジゼルをサンタンヌ病院に連れていった、それ彼女が望んだからです。あれ以来、彼女はずうっとひとりで彼に会いに来ていたのです。ジゼルがなぜ彼に会いたがったか、あなたどう思います。あなたには意外でしょうけれども、それ彼があなたの患者だったからです、とそうジゼルが言ったのですよ、ほんとうに。つまり二人には精神科医であるあなたの患者であったという共通点があり、それが二人を結びつけたのです。こう考えてきて妙な気持、なぜってこうしてわたしがD＊＊まで出掛けたのもあなたのせいだという気がしてきたから。

ねむくなりました。例の赤毛青年は本を読んでいます。やがて、パリ、休暇のおわり、ヴァイオリンの練習、音楽会、なつかしいけれど不安に充ちた都。パリです。ではさようなら。

萌子

パリ　　九月四日　夜

D＊＊でのこと、思い出すと胸が痛みます。彼、相場亮一画伯のこと、わたしは病気のことはよくわからないのに、今の医学が彼をすくえないなんてけしからんと思うのです。あなたは精神科のお医者さんなのだから、もそっと一所懸命に研究してあの人をなおしてあげる義務がある、ええ、ありますとも。詩集をとどけてあげた報告にジゼルのところへ行くべきなんだけれども、あのラ・サンテ監獄のいかついたたずまいどうも虫がすかず、金網ごしに彼女の顔を見るのも気の毒で、だいいち亮一さんが人間でなくなったなんてとても言えず、思案のあげく行かないことにしました。といって、のほほんとしてたわけじゃあない、ちゃんとヴァイオリンの練習はしたのよ、練習につぐ練習、八時間、昼食に三十分ほど出ただけ、ノルマを果したの思ったらとたんにひだるくなり、フランクのソナタはどこかへ、まあたぶん指の中に吸いこまれてしまった。

しあわせな気持で、あと数時間は自由な使い出のある時

問としてわたしの前にある、そんな充ち足りた気持で食事のため外へ出たのです。すっかり闇に潰った森は夜霧の綿をかぶって銀色で、ブールヴァール・ボーセジュールに人通りは無く、何だか妙に淋しく、人気をもとめてモーツァルト通りにさまよい出、さすが人出はあったけれども、知った人もなく、わたしひとり、たったひとり、あてもなく歩いているのです。あたりに続くのはたしかにパリなんだし、このひとつき留守にしたものの、これでもう四年もいる（あなたとカンボジュ号でマルセイユに上陸したあの日からまる四年経ったのよ）のに、まるで見知らぬ、よそよそしい町並みなのです。むしょうに誰かに会いたくなって、メトロに乗り、まわりの見知らぬ人々と揺れながら、さて誰に会おうかと考えた。日本館へ行っても仕方がない、あなたがいた頃の人は誰もいない、啓吾、井尻、高松、亮一、アレキサンドル、みんな出てしまったのです。帰国した人、引越した人、発狂した人、死んだ人、さまざまな行路で消えてしまった。あなたが去ってからわずか一年半で何もかも変ってしまった。けっきょくわたしの行けるのはバザン夫人と啓吾だけれども、バザン夫人は行けばひきとめられ長居することになるし、啓吾は、ええ本当のこと言っちまいましょう、わたし啓吾のところへ行ったのですよ、夜、女一人で男のアパートへ、です。

あなたが帰国してから彼には、彼だけには会わないようにしていたのです。それが会うようになったのは全く外的な事情でわたしの意志でも彼の意志でもないのです。バザン氏のお葬式、ジゼルの裁判、つまり彼とわたしの共通な友人の事件のためで、そんなことあなたはようっくご存知のくせに、七月末のお手紙で、たとえ冗談にせよ「啓吾に気をつけろ」だなんて、ひどい、おこりました、わたし、だから休暇中の住所教えなかったのです。北フランスの海岸にひとりでいたのですけどもね、住所は永久に教えてあげません。それで帰ってみれば、いろんな人の手紙は溜まっているのにあなたのおたより一通もない、これどういうことなの。わたし怨みつらみ並べるつもり毛頭なく、この手紙もいつものように日記ふうにそっけなく書くつもりだったのに、つい本音でた。啓吾を訪ねたと書きゃあ、あなたが、あわてておたよりくれるなんていうさもしい魂胆だ。ええ、曲ったくねった文字でしょう、お見とおし、わたし酔ってるの、そばにボージョレの瓶おいて飲みながら書いてるんだ。

気はたしかだからご安心を、眠れないと飲むの、ほとんど毎晩飲むってのは毎晩ねむれないってこと。こう書いたら涙出た。証拠に一滴だけたらしとくわね。何書いてたっけ。そうだ、啓吾のとこへ行った、モンパルナスの墓地近くの狭いさびれた道、こわいの我慢して行った。中庭に面した四階で、階段はきしみ、ほこり臭く、暗く、金あるくせにこんなところ住むとはきざな男とぶつくさ言い、ドアをたたくといなかった。安心したでしょう、いなかったの

です。もっとも彼寝てたのかも知れない。一度しかたたかなかった。二度たたいて彼がいたら困ると思った。それで逃げたの、一散に、モンパルナス通りまで。

さすが繁華街だ。人は出てるし、店は満員で、金曜日の夜だというのに平気で肉料理食べ、飲み、話し、笑い、愉快そのものの青春を陳列していて、わたしはひとり（またしょうこりもなく愚痴）だ。そこで飲んだ、飲みました、あなたの萌子は、ひとりでお酒を飲み、飲んでからお腹がすきすきなの思い出した。しまったと思えど取返しつかずもう頭をがんとなぐられたように酔ってくるのにまけてテーブルにしどけなく頭を横にして伸びてるところへ啓吾が来た。

いったい何て人だ、必要はないときに現われる、ひどいよ。でもわたし起きあがり、すると心もひきしまり、酔いも小さく縮こまり、啓吾を睨むことができた。わたしの醜態をすべて見てるくせにこの人微笑み、そのお人好しの微笑みに、わたし微笑みかえした。なぜって人前で居住いをただした偽善者はわたしなのだから仕方がない。そこでわたしはD＊＊のことを、亮一が人間でないなった話をした。

啓吾はわたしの話を、ことのほか真剣にきいてくれた、真顔で、何度もうなずいて。あのひとは他人の不幸をがまんできないのです。あのひとは単純だけれども、よい人です。ひとの世話ばかしやいてるものだから自分の勉強ができやしない。このごろ啓吾は小説を書いている、書き出したの。それがいつできるかあの人のことだからわかりやしない。とにかく、酔ってべろべろのわたしの話をあの人は真顔できいてくれた。わたし何を書いてるのかわからなくなった。眠くなった。

九月五日　昼

飲みすぎで二日酔い。昼になったら頭痛がとれ、やっとすっきりしました。きのう書いたぶん読んではずかしく、破こうかと思ったけれども嘘書いたわけじゃあなし、これはこれでわたしの生活の一断面なのだからあなたに報告しておこうと同封します。

昨夜、啓吾はわたしをおくるときかなかったけど、わたし、ひとりで帰ってきました、ちゃんとメトロに乗り、乗り換えもまちがえず、倒れもせず。

書くのを忘れていましたけれども、きのう啓吾は新しい情報を教えてくれました。東京のあるデパートで《相場亮一個展》がおこなわれるというのです。さいきん東京から来仏したK新聞の美術記者からきいたというので、その記者もその準備もあって来たというのですが日本における相場画伯の評判はどうなのですか。新進の天才画家としてもてはやされているとすれば、ほんとに痛ましい。K新聞に注意していて、もし何か載ったら教えてください。ジゼルに送ってやります。

ジゼルには来週面会にいく予定です。ラ・サンテ監獄、

いやなところだけれどもあの人のためなら仕方がない。
きのう、わたしが飲んだくれたのは、正直に言って、ヴァイオリンがうまく弾けなかったからです。音がどうやっても出ない。夏中海風に当って湿気たせいかもしれない。楽器屋へ持っていってみます。
これで封をします。もう一度書きます。おたよりください。でないとまたお酒をのむ、のめば、わたし何をするかわかりませんよ。

萌子

パリ　九月七日　朝

あなたが旋風のようにパリから消えた夜、アンヴァリッドの待合室で、あなたは煙草をのんでいた、たしかあなたは、その前日まで禁煙していたのだから、あれはずいぶん不審な行為、つまりその日に何か重大な出来事があった証拠よ。
わたしとしたことが今頃になってこんなことを思い出し、はしたなくもわりなくも悩むなんて、どういう頭の構造なのやら。なにしろ、この手紙を書く直前にそのことを思い出し、すぐ筆をとったのです。わたしの記憶の帯がそこだけ破損していたのが不意に補修されたのね。こういうの心理学のほうで何と言うのかしらん。
やはりわが愛器はすっかり湿気ていました。それで楽器屋へ持っていったまま。練習用にかわりのヴァイオリンを貸してくれましたがこれが素晴らしい音色。名もない器なのに、びっくりするほど響くのです。歌うのです。ためしにルクレールのソナタをひいて楽しんだところです。続いてあなたの好きなレグレンツィとアルビノーニを演奏してあげましょう。
実のところルクレールでもひかないと気が滅入ってしまうのです。相場さんはあんなふうだし、それにもう一つ悲しい話をきいたのです。パリの邦人仲間では周知の事件、モナコ交響楽団の加藤恕彦さん夫妻がモンブランで遭難された話、この一月、日本人と会わずにいたのでそれを知ったのはほんの昨日なのです。きのうの日曜日、廊下でであったピアニストの林さんからききました。帰って泣いてしまいました。あんなに才能のある（天才といってもいいのです）しかもあんなに幸福な人達が亡くなるなんて、神様は残酷すぎます。
あの人のフルートののびやかな音色。いつか聴いたテレマンの三重奏曲が耳に明るく残っています。加藤のボーヤがフルートで、マーガレットのオーボエがぴたりと合って。ああいうのが正真正銘の〝重奏〟というのでしょうね。
空耳ではありません。カッコウでした。ブーローニュの森にカッコウが鳴いているのです。今朝、散歩している間

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

は聞えなかったのに、家でこうしていると聞えてくる。ウグイスもよく鳴きます。それから名の知れぬ小鳥の声が空気に充ちあふれるばかり。みんな採譜してありますから動物学者にでも会ったら演奏して名前を教えてもらいましょう。

萌子

パリ　　九月一〇日

夕暮のセーヌの象牙色の河岸をあてどもなく散歩し、バザン家へ寄って帰ってきたところです。

ユシェット通り二三番地。おぼえてらっしゃるかしらんねえ、あの空気の薄い地下室であなたと芝居を見、泥棒猫通り（ほらRue du chat qui pêche よ）を抜けようとしたら、こわあい怪物男にであったのを、それからよどれ水のように霧が深くてなんにも見えず、冷たくてさびしくて人さらいでも出そうな岸辺を二人で散歩したのを。あれから一年半たったのです。ほんとにまかふかしぎ。あなたの帰国はほんの昨日のようなのに、もう一年半も昔のことなのです。あの時のパリは何だか全く別の童話の国みたい、あなたがつくりだしたお話の世界のよう、いまのパリとは何の関係もない、非現実の、そうですね、昨日の夜の夢さながらに思えました。

若い人たちが赤ん坊のようにわがままに笑ったり叫んだりしながら横に並んで歩道を占領しくりだしてきます。小麦色に赤銅色、みごとに日焼けして夏の時間を今にひきながら歩いています。若い若い学生さんです。地中海で思い切り泳いだのでしょう。パンタロンと海賊シャツがよく似合う。自分も若いくせにさ、ばあさんみたいなこと言ってさ、と思うでしょ。でもあの人たちにくらべたらわたしなんかてっきりもうおばあさんだ。ほんと、若くないのです。年の話はここでうちきり、河岸を歩きましょう。

鶯色の鉄箱を開いて勲章や版画や本を並べている古本屋の褐色のひからびた爺さん、カメラを向けている肥って年老いた二人連れのアメリカの観光客、これはパリ観光案内書の写真のとおり。ちがったのはノートル・ダム。この大寺院ときたら百面相の巨人のようで、見た数だけの仮面があり、どれがほんとうの顔だかわかりやしないので、きょうのは、プラタナスのひげをつけてまばゆい西日でしかめっ面、そんな顔に不釣合にえれがんとなイール・ド・フランス製の雲の帽子。

みぎわにおりてみました。あなたと〝霧のお産〟に立会ったあの場所、一本のマロニエの大木が堤防をせせり、ポン・ヌフの間近なあの場所、若い男が釣りをしていました。目付が三角、ギャングの見張役ふぜい、あたりに人影なくとくるといやなかんじ、なんだか身の危険をひしと感じて引返しました。昼間でもいんきでくらくてお化けむきの変な場所、あんなところに深夜、しかも濃霧のなかを、たとえ二人だったにしろ、よっくも行けたものですねえ。

ブールヴァール・サン・ミッシェルをルュクサンブール駅まで下りました。果物屋の店内よろしく学生たちいっぱい。ヴァカンス気分で両腕まるだしの極端な裸みたいな軽装をしているのや気の早いのはもう冬仕度で外套なんか着てる。なんと、毛皮を着ている人、これはさすが年輩の、まあ四十五ぐらいかな、恰幅のよい奥様で、肉食獣にふさわしく大きな口から牙のはみでた方でした。

駅前で爪立ち廻転、これはあなたの真似よ。でも、あなたのようにこの場所に立つのがこれで最後だなんてオオゲサな感慨はありっこないし、むしろこれから何百遍もここを通る気がして、いいくらかげんの観察でした。絵具箱を返したみたいに色とりどりの車、象牙色のアパート、角のAU DEPART というカフェの薔薇色の幌、と、きれいな色にはっとして止ってみると花屋でした。赤い花が目立った。サルビア、カンナ、アマリリス、日本では今頃、彼岸花が咲いてるだろうなとちらと思ったら花屋のおばさんがにっこり。多分わたしの珍妙な廻転ぶりがおかしかったのね。

アマリリスの花束をバザン夫人に贈りました。夕食を御一緒して、帰ってきました。

ヴァイオリンの練習をおえて、シャワーに汗を流したところ。書くのをやめようかしらんと考えたけれども、書くことにします。バザン夫人のことです。妙な事を言われたのが気にかかるのです。「モエコさん。死ぬってことどうお考えになる」とおっしゃるのでわたしは「わかりません」とお答えしたのです。以下次のような会話でした。

「でも、人間が死ぬってことお考えになることはあるでしょう」

「それはあります」

「死ぬのは恐いとお思いになる」

「ええ、それはもう」

「わたくしはねえモエコさん」夫人は深い溜息をつかれました。「死が一番親しいお友達て感じがするんですよ」

わたしは黙っていました。死が親しいお友達ということは、やっぱり妙でしょう。

九月一三日　夜

前の文章を書いてから三日も経ちました。いそがしかったのです。まずおとい、ジゼルに面会しました。この一月会わないうちに顔色はまっしろになっていました。あなたも見慣れていた、あの日焼けしたジゼルの痕跡もないほどの白さで、お化粧は全然せず、そこへ長かった髪も男の子みたいに切っちゃって、まあ男の子ね、十六、七のなまっちろい少年です。看守が面会の記録をとる必要上、フランス語でしゃべろと命令するのに、隙をみてちょろっと日本語で話をしてやる、そんないたずらが二人の会話に元気をつけるのだけれども、どうも話ははずまない。ジゼルは

黙ってるわけじゃあない、よく話すんですけど、どういったらいいかしらんねえ、こっちの話にかまわず勝手にしゃべってる感じで、わたし、どぎまぎしてしまう、何だかおこられてるみたい。詩集を亮一にとどけたと言っても感謝するわけじゃなし、亮一が人間じゃないなくなった話をしても同情や驚きを示すわけじゃなし、わたしには、ジゼルの本心がまるでわからない。以前からわからなかったのだけれども、この頃はほんとにわからなくなった、だからジゼルに会ってもたのしくない、わるいけれどそうなのです。ラ・サンテを出たところで夕刊を買ったらジゼルの記事が目につき、びっくりしました。すぐ思い出したのはバザン夫人のことです。心配ですぐいってあげたのです。なにしろ新聞に事件のことがあんまり大きく出たものですから。

さいわい夫人は新聞をお読みにならなかった様子。ラジオはこわれていますし、テレビはないので、ニュースは御存知ないのです。ジゼルの写真が大きく出ていました。この前の公判のときので、これと同じものを見たように思えます。白いスーツを着て、少しやつれてはいるけれど、いつもながらこなまいきなところがかわいらしい。目を少しあげて群衆にむかってにっこり笑っています。結婚式をおわって教会から出てきた花嫁みたいなさわやかな明るさがあります。これを新聞記者は〝テテブテしい笑い〟と注釈しているのです。なぜいまごろこんな記事を出したのかといえば次の公判期日が迫っているからです。こんなことはあなたの方が御存知でしょうけど、フランスのCour d'Assise(これは重罪犯罪所と訳すんですか)というのは三カ月に一度開廷になるんだそうですね。井尻さんはさすが大学の法科の先生で、あの人にきいてわたしも少しは裁判のことが分るようになりました。予審判事のことや陪審員制度なんかもいまでは曲りなりにも理解できます。こんなことを知っていても音楽家には無駄なことですけれども、ジゼルのためにと思ってちょっぴり勉強したのです。バザン夫人はこの次の公判に証人として喚問されることになっていて前からそのことを苦にしておられたのです。そんなことで気をつかっていたやさきに出たこんどの記事は、内容がひどく、まずは完全な中傷です。ジゼルのねじけた心は混血児のせいで、その元は黄色人種である母親の残忍な遺伝をうけついだという趣旨なのよ。金曜日ごとにその新聞がおこなう特集記事で、見開きに事件の詳細(ほとんどがすでに報道されたことですけども)が書かれ、バザン夫人が見たら耐え難い思いをされたにちがいありません。

ともかく夫人の前で事件の話はごはっと。でも夫人はいろんな新聞をせっせと買うのです。ファッションに興味があるとか何とかおっしゃるけれども、ほんとは事件のことが気になって、おおいそぎで見出しと写真とを眺めるのです。あとは何にも読まずにほっておくので、わたし行くたんびにまず新聞の整理、たばねて下までさげていき捨ててくる。ですからこの記事も夫人は知ってるおそれがある、

そう思ったのですが、案外に静かで、事件が発覚したときみたいなとりみだしもなく、長い長い巻物みたいなフランドル刺しゅうを見せてくださったり、日本にいた娘時代のことや戦争中地下室に住んだ話などなさり、ごきげんなのですね、いつもより、よいくらい。バザン氏とジゼルの写真が並べて煖炉の上に飾ってあるのへ、ねえピエール、ねえジゼルと呼びかけ、まるで二人がそこにいるみたいで、ほらモエコさんのお花だよ、ほらモエコさんがつくったどちそうだよと並べたりなさる。なにかのひょうしにわたしをジゼルと呼んだりして、その間違いに気づかれないようすなので、ついジゼルみたいにふるまったりしました。

ねえ、やはりバザン夫人はへんなのです。もしかすると新聞を読んだのかもしれない。だってこの二日間、なんだかさびしがりすぎますもの。モエコさん、モエコさんてかたときも離れないのですよ。おきのどくだけれども、正直、息がつまる、わたしに何もしてあげられないとわかるから。暗い部屋に坐っているとはっとする、というの、夫人がジゼルそっくりに見えてくることがあるの。ほそおもてに窓みたいな大きな目、自分自身に向ってするような不思議な微笑、それに声。あなたも電話でジゼルと夫人をまちがえたくらい似てた声が、最近はすぐそばでもそっくりなのね。こんなこと医学的にありうるかどうか知りませんけれども、ジゼルの髪の毛の色、肌の色、目の色など外側はバザン氏ゆずりで、骨の形だの筋肉だのの内側は夫人のものって感じです。

今から息抜きに、どこかへ出掛けてこようと思います。日曜日、みどとな晴れ、森のところどころに金茶や山吹色の葉が明るく、秋を思わせます。

萌子

シャルトルにて

すばらしい晴天にさそわれてカテドラルの町に来ました。午頃からもう何回となく聖堂に入ってはうす青い焼絵硝子の光にひたっています。堂内へは残念ながら観光客がひっきりなしに入ってきますけれども、それでもわたしひとりというさいわいな瞬間もあって、そんなとき、つかのまの美しい色（ほんとに刻々にかわっていくのです）にわたしが染まって、心の底までが色になりきって、幸福です。

バザン夫人はわたしがカトリック信者でないといって残念がられ、何度かミサへも連れてってくださいました。けれどもわたしは……またバザン夫人です。なんだか妙に夫人のことが気になるのです。

萌子

九月一七日

九月九日付のあなたのお手紙うれしく受取りました。ほんとうにうれしかった。夏中一日も休まず御仕事だなんて、あなたも大変ですね。その現象学的研究とかいう難かしい

論文がうまく出来上りますように祈っています。もっともわたしなんか祈らずともあなたの熱心と力量だったら立派にしあげてしまうでしょうけれども。K新聞の切抜き、ありがとう。九月はじめのわたしの手紙にこのK新聞のこと書いたのですけれども、あなたのおたよりと行き違いになったのですね。日本とフランスと、離れている二人が偶然同じことを思うなんて不思議ですね。新聞の見出しに《狂気の画家》とあったのが気にさわりました。去年は《気違いと誤診された天才画家》と報道した同じ新聞が、全く別な記事をのせている。しかも一言の弁解もなしにです。わたしが前便で書いたこと気にしちゃだめ、あなたはわたしに手紙など書かなくてもいいの。あなたは目茶苦茶に忙しいのだから書きたい時に書いてくだされば けっこう。わたしのほうは勝手気ままに、日記のつもりで書いているのだから。九月になって三十度をこすなんて、東京は暑いのですね。残暑ということばはパリでは実感がありませんね。八月の末からもう秋のはじまりですものね。マロニエとプラタナスの葉があれよと思う間にしおれ、街のようすがなんだかさびしくなる。きょうなど寒くて、外套をきて出ないとかぜをひきそうです。

マドリッド街で楽譜を買ってから、ブールヴァール・オスマンを歩いていたら井尻夫人のエレーヌに会いました。あなたの知っているエレーヌとはすっかりちがってしまいました。既婚婦人らしい落着きと気品と、それから生活からくるやつれがどことなく見られ、つまり年輩の女性というふうで、ほんとはわたしより年下のくせに、四つも五つも年上にみえるのです。自分の家庭のことばかり話していました。mon mari の道場の経営が苦しいとか、東京の大学に道場経営の事実が漏れて mon mari は馘になりそうだとかこぼし、そうかというと mon mari の柔道の実力のほどは師の国香七段をしのいでフランス一だのヴァカンスにはカンヌのホテルで暮したとか自慢するのです。香水が変っていました。あなたも御存知の〝マダム・キク〟から、スキャパレリの〝ショッキング〟へ。あんまり強烈なにおいなので思わず小鼻をうごめかしてしまいました。

むかしからそうでしたけれど、エレーヌの前だとわたし話すことがなくなって、黙って聞いているばかりです。考えてみれば、エレーヌのために井尻さんは東京の大学の職をふったうえに、奥さんと五歳になる男の子をも振り捨ててしまったのですね。井尻さんは、きっぱり帰国するのをあきらめ、エレーヌと一生パリで暮す決意をしたのです。ところが、エレーヌはそうではないので、どうやら日本に帰りたくて仕方がないのですね。その理由は助教授という身分に未練があるためだと、彼女、自分で言うのです。柔道教師より、大学助教授のほうが何となくえらそうで、威厳もあり、自分にふさわしい（ほんとうにそう言ったのです）と考えているのです。助教授でいるためにはどうしても二年後には帰国しなくちゃならない、なぜなら公務員の

海外出張というのは、三年以内しか有効でないからというのです。エレーヌは、昨年の春、あなたが大急ぎで帰国したのはこの海外出張期間がきれそうになったからだと言い、あなたがパリに丁度二年半滞在していたことを指摘してましたよ。そんなこと、わたし考えもしなかったけれどそう言われてみれば、あなたは監獄医で、監獄医というのは法務省の役人だからつまりは井尻さんと同じ公務員ということになるのかしらんねえ。

突然話題が裁判のことになりました。わたしは聞きたくなかったのですがエレーヌはとにかく大層な関心の持ちようなのです。mon mari の影響で、彼女、いっぱしの裁判通になっているのですね。この前の公判のとき、弁護士が精神鑑定を申請したことを始めて知りました。するとジゼルは気が狂っていたことになるのでしょうか。でも何だか信じられません。わたしが知っているジゼルは、それは風変りでしたし精神科医であるあなたの診察を受けていましたけど、つゆほども狂暴なところはありませんでしたからね。弁護士は刑を軽くするための方便として狂気を主張したのでしょうが、そうすればジゼルは病院に一生とじこめられるのでしょう、あの狂った絵描きさんのように。

ジゼルはふしあわせなのです。なぜだかひどく不幸で、その不幸のもとはバザン家の血筋にあるのか。それともジゼルがバザン家を不幸にしたかはわかりませんが、とにかく夫人は、ジゼルのような不幸な子供を生み育てたということで御自分を責めてらっしゃる。そのことがわかるので、わたし、傍にいるのがつらい。夫人にわたしがジゼルを思い出させるようでいたたまれないのです。そんなわけで、エレーヌに別れたあと、木曜日で暇だったのですけれど、バザン夫人を訪ねてあげませんでした。

この手紙、モンソー公園で書いています。とのぐもりの空のもと木々は水の底に沈んだみたいに静かですが、景色は何だかうすきみわるい。はっぱには夏の疲労がたまっていて、病気にかかったようにいきおいがない。黄ばみはじめ、やがて落ちていく葉はまだよいのですが、常緑樹のはっぱは汚れたっきりでみすぼらしく、それになんだか不吉です。申しわけないけれどもバザン夫人を思い出します。

ちょうど便箋がきれました。これでさようなら。マロニエの葉を一枚いれときます。

萌子

パリ　　九月二一日　朝

困ったことがおきました。バザン夫人が自殺をはかったのです。昨日モーツァルト通りに買物に出ているあいだ妙に胸さわぎがして、それであわてて帰ったら啓吾の置手紙でわかりました。あまりの暗合にびっくり、病院にかけつけましたけれども、面会時間外だといってことわられました。看護婦の話では夫人の生命はとりとめられるようすで、いまはこんこんとねむっておられるとのことでした。安心

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.